

# 道徳教育と児童文学

おぶのら

## 現在の小学校道徳教科書から

「特別の教科 道徳」、なんともおかしな言葉です。すでに二〇一八年度から小学校では「道徳」が教科化され、二〇一九年度からは中学校でも教科化されることとなりました。教科化とは、教科学習としてその評価が通知表に記載されるということです。そして「特別」とは、専門の教師でなく学級担任が行うこと、いわゆる「徳目」が配列されていることのためのようです。そして、この科目を「評価」することは、子どもの理解度を評価するのではなく、子どもの内面、子どもの心そのものを評価することにつながります。それは子どもに対する重大な人権侵害ではないかと……と考えながら、「教科書研究センター」へ行つて小学校の道徳教科書に目を通してみました。

各社の一年から六年までの教科書で使われているさまざまな読み物教材の中で、「児童文学」として書かれたものが多く使われていることを確認しました。各社とも美しく楽しいイラストがつけられ、レイアウトにも工夫が

こらされています。教材としては「編集委員会」が作った部分も多いのですが、既成の作品からも多くが採られています。特に「道徳」の教科書のために作家に依頼したものはなさそうです。作者の名前が明記されている作品もあり、久保喬、奈街三郎、平塚武二、小出正吾、後藤檜根、花岡大学、斎藤隆介、大石真、竹田まゆみ、大蔵宏之、大原興三郎、魚住直子、早乙女勝元、今関信子、小林陽子などの方々のお名前が、特に低学年の教科書で見うけられました。またイソップ童話や、易しくリライトされたトルストイの民話的作品やワイルドの「幸福の王子」などもあります。その中には、複数の出版社の教科書に同じ作品が掲載されているものもあり、その一例として「はしの上のおかみ」(奈街三郎)を見てみますと、この作品は学習研究社、学校図書、教育出版の三社の一年生用の道徳教材となっています。物語は、山奥の川にかかった一本橋でオオカミが渡ってきたウサギやサルなど、自分よりも弱い動物たちを乱暴に蹴散らして通りますが、クマと出会った時に、クマ